☆年間第30主日（10月25日）の聖書朗読☆ ※主任司祭からの解説があります。

第一朗読　（出エジプト記　２２章 ２０～２６節）

主は言われる。寄留者を虐待したり、圧迫したりしてはならない。 あなたたちはエジプトの国で寄留者であったからである。寡婦や孤児はすべて苦しめてはならない。 もし、あなたが彼を苦しめ、彼がわたしに向かって叫ぶ場合は、 わたしは必ずその叫びを聞く。 そして、わたしの怒りは燃え上がり、あなたたちを剣で殺す。 あなたたちの妻は寡婦となり、子供らは、孤児となる。もし、あなたがわたしの民、あなたと共にいる貧しい者に金を貸す場合は、 彼に対して高利貸しのようになってはならない。 彼から利子を取ってはならない。 もし、隣人の上着を質にとる場合には、日没までに返さねばならない。 なぜなら、それは彼の唯一の衣服、肌を覆う着物だからである。彼は何にくるまって寝ることができるだろうか。 もし、彼がわたしに向かって叫ぶならば、わたしは聞く。 わたしは憐れみ深いからである。

第二朗読（使徒パウロのテサロニケの教会への手紙Ⅰ　１章 5c～10 節

皆さん、わたしたちがあなたがたのところで、 どのようにあなたがたのために働いたかは、御承知のとおりです。 そして、あなたがたはひどい苦しみの中で、 聖霊による喜びをもって御言葉を受け入れ、 わたしたちに倣う者、そして主に倣う者となり、 マケドニア州とアカイア州にいるすべての信者の模範となるに至ったのです。 主の言葉があなたがたのところから出て、マケドニア州やアカイア州に響き渡ったばかりでなく、 神に対するあなたがたの信仰が至るところで伝えられているので、 何も付け加えて言う必要はないほどです。 彼ら自身がわたしたちについて言い広めているからです。すなわち、わたしたちがあなたがたのところでどのように迎えられたか、 また、あなたがたがどのように偶像から離れて神に立ち帰り、 生けるまことの神に仕えるようになったか、 更にまた、どのように御子が天から来られるのを待ち望むようになったかを。 この御子こそ、神が死者の中から復活させた方で、 来るべき怒りからわたしたちを救ってくださるイエスです。

福音朗読　（マタイよる福音書　２２章 ３４～４０節）

　そのとき、ファリサイ派の人々は、イエスがサドカイ派の人々を言い込められたと聞いて、 一緒に集まった。 そのうちの一人、律法の専門家が、イエスを試そうとして尋ねた。「先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか。」
　イエスは言われた。「『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、 あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の掟である。 第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』
律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。」

朗読解説　ー主任司祭より皆様へー

　秋らしいいい天気になりました。幼稚園では月曜日に芋ほりが行われます。収穫の季節なのですね。私たちの霊的な収穫はどうでしょうか。コロナ・ウィルスのせいにしてはいないでしょうか。どのような障害があっても私たちの魂の救い、そして隣人の魂の救いに力を尽くしましょう。世界ではコロナ・ウィルスの感染拡大が続いています。日本では急増とまではいっていないようですが、油断せずに、感染予防の徹底に努めましょう。
　この季節、ハロウィンのお祭りが日本でも盛んになっています。お祭りに仕立ててお祭り騒ぎをしましょうというのはいかにもアメリカ的・日本的な発想ですが、その起源を考えると、大騒ぎするものではないようです。その由来はイギリスのケルト文化に根差しているようですが、カトリックそして大方のキリスト教諸派の対応は宗教的な関係はないとしています。ですから、私たちとしては子どもの世界のものであっても悪魔的なものを崇拝するような言動は避けなければならないと思いますので、ご注意ください

第一朗読　（出エジプト記　２２章２０～２６節）

「もし彼が私に向かって叫ぶならば、私は必ずその叫びを聞く」これが主である神の心なのです。私の主である神。この神はどんな人であっても、特に貧しく弱い立場にある人の神なのです。ですから、旧約時代は言うに及ばずどの時代にあっても主イエスの神を信じる人々にとって、神は私たちに「私は憐れみ深い神である」と宣言されるのです。どんな罪びとであっても、人がどんなに憎みさげすむ大悪人であっても神はその人が心から神に叫ぶなら、その声を聴くと言われるのです。誰の死、滅びをも望まれないからです。
出エジプト記ではイスラエルの民が叫びを神に挙げて神はその叫びを聞かれ、エジプトからの脱出がなされたことを過越祭の記念として思い出されているのです。この時の契約は今も私たちにイエス・キリストを通して告げられています。（福音書）

第二朗読（使徒パウロのテサロニケの教会への手紙Ⅰ１章 5c～10 節）

テサロニケの教会の人々が「ひどい苦しみ」という迫害の中で聖霊による喜びとキリストの言葉を受け入れ、主に倣うものになりギリシャのすべての信徒の模範となったことをパウロは喜んでいます。その信仰の行いはギリシャ全土に響き渡ったとも述べています。テサロニケの信徒の皆さんの信仰生活がいかに素晴らしかったかがわかります。パウロの宣教の成果が表れているのでしょう。その信仰の生活はどんなだったのでしょうか。
詳しくは述べられていませんが、私たちがあなた方のところでどのように迎えられたか」と書かれていますので、きっと主イエスを信じる仲間として、また使徒として温かく迎えられたことがうかがわれます。また「あなた方がどのように偶像から離れて神に立ち返り、生ける神に仕えるようになったか」と書き、偶像崇拝から主イエスを信じる誠の信仰を得るようになったことがうかがわれます。このようなことからイエスが福音で述べているような、貧しい人々への支援と愛の行いが実践されていたことがうかがわれるのです。私たちの信仰は愛の実践において現れるのです。

福音朗読　（マタイよる福音書　２２章３４～４０節

今日の福音でイエスは福音を完成しに来た方であることを示されます。律法の中で最も大事なおきてとして申命記の言葉が出てきます。「聞け！イスラエルよ！」。「われらの神主は唯一である」という絶対性と、その対をなす「隣人を自分のように愛しなさい」という言葉はイエスにおいて真実味をもって響いています。イエスはこのおきてを自ら実践されたからです。それも十字架上の死をもって実践されたのです。イエスは旧約のおきてを自ら実践されることによって旧約を完成されたのです。先週の福音ではファリサイ派の人々や律法学者らとのやり取りがなされていますが、その中で彼らはイエスが正しい人物であることを悔しさをにじませながら認めているのです。それほど完璧に旧約のおきてを実践されていたのです。そしてそのうえで、より素晴らしい道を示されたのです。「友のために命を捧げることほど素晴らしい愛はない」。そしてそれを実践されたのです。イエスの要求は自らが実践されたことなのです。イエスにおいて前例があるのです。テサロニケの教会の人々のように私たちも小さな愛の実践に努めましょう。

カトリック足立教会
主任司祭　野口重光